

2019年、日本におけるトルコ文化年： 「トルコ至宝展」と「トルコ日本研究学会」を振り返って



海外交流

宮下 遼*

*2019 Turkish Cultural Year in Japan;
“The Exhibition of the Ottoman Treasures and the Empire of
Tulips” and “The 4. Conferance of The Japanese Studies in Turkey”

Key Words : Turkey, Turkish, Japanese Study, Ottoman Empire

2019年は、日本国とトルコ共和国の合意に基づき「日本におけるトルコ文化年」と定められている。2003年の「日本におけるトルコ年」に引き続いての文化交流事業である。トルコ共和国の文化観光省とその出先機関ユヌス・エムレ・トルコ文化センターが、日本各地で講演会やトルコ語教室、演奏会、トルコ弓道やトルコ・コーヒーなど各種伝統文化の体験会等、種々の催しを精力的に企画・実行している。本稿ではそんな一連の催事の中で上半期の集大成と位置づけられる2つの催し、すなわち東京、京都で催された「トルコ至宝展」とイスタンブールで開催された「トルコ日本研究学会第4回年次大会」を通じて、日土交流の現状を雑観したい。

トルコ至宝展

日本ではさほど知られていないが、トプカプ宮殿博物館は世界的に有名なコレクションを幾つも有する。第一にイスラーム聖遺物コレクション。こちらは預言者ムハンマド様や正統ハリーフア諸聖の用いた日用品や武具、衣服などの遺物を筆頭に——ちなみに預言者ムーサー（モーゼ）が海を割ったときに用いた杖もあり、宮殿博物館では万国の観覧者が微笑ましくそれを見守るのがお約束である——スルタ



ンの即位式で用いられたオスマン1世の宝刀などの名のある名刀群から成る。また、魔除け呪文ヴェフィクを施された矢玉・悪運除けの呪衣群なども世界に類例のないコレクションに数えられるだろう。いまひとつは陶磁器コレクションで、こちらは中国、日本、朝鮮の陶磁器とオスマン帝国製のそれを含めて世界最大の収蔵点数を誇る。東アジアの陶磁器研究者にとっては宝の山であるし、私たちトルコ研究者は金銀宝石を鏤めるなどの「オスマナイズ」の豪華な様相に感嘆する。陶磁器コレクションはあまりにも膨大なためいまだその全容が展覧された例は管見の及ぶところないが、他のコレクションに関しては、主なものはトプカプ宮殿の常設展に組み込まれ、また一部は日本で公開されたこともあった。

今回の至宝展の目玉は筆者から見れば2つ。まず、オスマン帝国のスルタン (Pâdişâh) たちが愛用した宝物やカトラリーなどの帝王の日用品が目をつけた。とくにオスマン朝人士の服飾文化の代名詞である長衣 (kaftan) のうち、スレイマン1世のそれが



* Ryô MIYASHITA

1981年11月生まれ
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程
現在、大阪大学大学院 言語文化研究科 言語社会専攻 アジア・アフリカ講座 トルコ語専攻 准教授 博士(学術)
専門はトルコ文学史、著書に『多元性の都市イスタンブール』、『無名亭の夜』ほか、訳書にパムク『私の名は赤』ほか。
TEL : 072-730-5311
E-mail : rm@lang.osaka-u.ac.jp

国外に持ち出され展覧に供されたのは個人的に眼福であった。ともすれば21世紀になった今でさえエキゾチックな御簾の奥の専制君主然としたイメージが先行するオスマンの帝王たちを少しでも身近に感じられる興味深い展示物と言えるだろう。

また、これまでトプカプ宮殿の常設展にはお目見えしなかった日本とトルコの友好史を象徴する展示物が（一部はドルマバフチェ宮殿博物館のコレクション）相当量、含まれた点も特筆されるべきである。エルトゥールル号遭難事件後、日本全国から集まった義援金を君府へ届けた山田寅次郎の奉呈した日本刀と甲冑などは、その存在を知られてはいても実物を目にする機会が僅少を極めてきた。ちょうどトルコ出張中にトプカプ宮殿の学芸員であり至宝展に随行したオミュル・トゥファン氏に話を聞く機会を得た。氏は日本側の博物館の大掛かりな宣伝に感じいていたが、寧ろ筆者は極東からもたらされた異質な宝物を、手探りの中で手入れし続け錆び一つない状態を保持してきた彼ら学芸員たちの生真面目さに心打たれた。

日本研究学会

いま一つの特筆すべきは、日本国イスタンブール総領事館の協賛を得て2019年6月28日ー6月29日にイスタンブールで開催された第4回トルコ日本研究学会である。開催校ボアジチ大学（Boğaziçi Üniversitesi / Bosphorus University）は、本学外国語学部トルコ語専攻科と部局間協定を結び、毎年留学生が行き来する縁の深い場所。友好年ということもあり西牧久雄総領事の開会の辞とともににはじまった学会は、40名近い登壇者による9つのパネルディスカッションが催される活況を呈した。筆者もボアジチ大学のオウズ・バイカラ准教授（Oğuz Baykara）の招きでトルコにおける日本研究の現況を実見する機会を得た。以下にその概略を記すが、なにぶん筆者はトルコ文学史が専門であるため門外漢である分野について適切な表現を出来ていない箇所もあるかと思われる。その責は学会発表者ではなく、すべて筆者の負うべきところである。詳細については学会HPも併せて参照頂きたい。

(<http://takvim.boun.edu.tr/bu/?q=node/1943>)

初日、トルコ海軍史を専門とする小松香織氏（早稲田大学）が、明治期日本を訪れたオスマン人ペル



テヴ・パシヤの日本観察を武士道への眼差しを軸に紹介したのを嚆矢として「思想と法」と題された第1セッションでは、大西克礼の美学論の分析、西田幾多郎の純粹主義の再考など日本美術史の研究枠組みを巡る研究発表が続いた。「社会と文化」と題された第2-4セッションは、漫画、アニメーションについての表象研究群からはじまり、明治100周年、150周年の記念事業の比較による明治の「歴史化」をめぐる社会的アプローチが発表され、和やかな昼食会を挟んだ後半には森有礼の教育論、現代日本におけるマイノリティについての実況報告と分析、日本文化における怪異についての書誌学的整理、戦前日本における東南アジアの日本人女性労働者についての歴史研究、そして日本語における感謝表現の語彙論的研究が続いた。「国際関係論、政治、経済」と題された初日最後のセッションでは、1951-55年のトルコ・メディアにおける日本表象や、日蘭関係史の概観など多彩な研究が披露された。

2日目は文学、歴史関連のセッションが主となり、前日を上回る観覧者が集った。筆者は日本におけるトルコ文学研究とトルコ語小説の翻訳の現況を報告しつつ、トルコ語→日本語翻訳の歴史と、幾つかの問題点について基調講演を行った。「言語と文学」と題された続く第6、第7セッションでは、日本文化における「気」の語彙論研究にはじまり、フェミニストとして谷崎潤一郎像を模索した評伝研究、川端康成「眠れる美女」における処女性の異化を巡る解題、藤原てい「流れる星は生きている」を植民地文学として読み直すアプローチ、太宰治「待つ」についてのテーマ批評、戦間期日本におけるモガと女給の文学表象論や、村上龍『コインロッカーベイビ

ーズ』を非西欧的ディストピア小説として読み直す
 解題研究など、いずれも堅実な文学研究が披露され
 た。

「歴史」と題された第8、第9セッションでは、
 日本における歴史叙述とそれを巡る議論を体系的に
 整理する史学史研究、20世紀初頭のオスマン語雑
 誌における日本記述とそのイメージ形成をまとめた
 書誌学的、社会史的研究、戦後日本における昭和天
 皇の役割変遷を追った制度史研究、吉田茂の自叙伝
 を手掛かりに占領期日本を扱う言説研究、そして日
 本におけるフィールド調査を通じて、教え子や家族
 の眼から見たイスラーム学者井筒俊彦の姿を追った
 評伝的研究などが発表された。

日本・日本文化研究者ではない筆者から見れば、
 いずれも文献学的に過不足のない堅実な研究群が多
 い印象を受けた一方、ディスカッションでは、トル
 コ・イスラーム美術がほぼ西欧美学の方法論で解析
 され得るという前提が発表者の中で揺るぎなく共有
 されていた点や、文学研究においては日本文学にお
 いて準古典とも呼ぶべき作品群の読み直しを中心と
 する解題研究が主で、80年代以降の作品や、トル
 コ系ドイツ人作家を扱うことの多い日本におけるト
 ルコ文学研究と好対照をなす点などが興味深かった。

おわりに

学会を主宰する日本研究協会 (Japon Araştırmaları
 Derneği) の会長を務め、元ボアジチ大学教授であ
 る日本史研究者セルチュク・エセンベル (Selçuk



Esembel) 女史が「ハンガリーから中国までの間に
 ある国でもっとも日本研究者の数が多く、なおかつ
 研究の中心地になっているのは他ならないトルコで
 ある」と誇らしげに語ったのは、とくに印象的であ
 った。たしかにトルコでは2010年代に入ってそれ
 まで5つほどあった日本語専攻科に加えて、各大学
 に日本語・日本文化専攻が続々と新設されている。
 そうした場が日本研究の拠点の態を為しつつあるの
 を念頭に置いての発言であった。翻って本学もまた
 トルコ語専攻を有する、総合大学としては日本唯一
 の機関であり、これまでも数多くのトルコ人留學
 生を受け入れ、また日本人学生を派遣してきた実績
 を有する。この日本トルコ文化年を契機として今後
 とも学術交流、民間交流双方において先導的役割を
 果たすため我々大学人の為し得るところは決して少
 なくないと勇気づけられる滞土であった。